

バキチの仕事

宮沢賢治

青空文庫

「ああそうですか、バキチをご存ぞんじなんですか。」

「知つてますとも、知つてますよ。」

「バキチをご存ぞんじなんですか。」

小学校でご一いっしょ緒ですか、中学校でご一いっしょ緒ですか。いいやあいつは中学校なんど入りやしない。やつぱり小学校ですか。」
「兵隊へいたいで一いっしょ緒です。」

「ああ兵隊で、そうですか、あいつも一いっとう等卒そつでさね、どうやってるかご存ぞんじですか。」

「さあ知りません。隊で分れたきりですから。」

「ああ、そうですか、そいじや私のほうがやつぱり詳くわしく知つてます。この間まで馬喰ばくろうをやつてましたがね。今ごろは何をしているか全まく困こまつたもんですよ。」

「どうして馬喰をやめたでしょう。」

「だめでさあ、わつしもずいぶん目をかけました。でもどうしてもだめなんです。あいつは隊をさがつてからもとの大工だいこくにならないで巡査じゆんさを志願しがんしたのです。」
「そして巡査じゆんさをやつたんですか。」

「それあやりました。けれども間もなくやめたんです。」

「どうしてやめたんだらうなあ、何でも隊に来る前は、大工でとにかく暮していたと云うんですが。」

「それやうそでさあ大工もほんのちよつとです。土方をやめてなつたんです。その土方もまたちよつとです。それから前は知りません。土方ばかりじゃありません、飴屋もやつたて云いますよ。」

「巡查をどうしてやめたんです。」「あんな巡查じゃだめでさあ、あのお神明さんの池ね、あすこに鯉が居るでしょう、県の規則で誰にもとらせないんです。ところが、やつぱり夜のうちに、こつそり行くものがあるんです。それあきつとよく捕れるんでしょう。バキチはそれをきいたのです。毎晩お神明さんの、杉のうしろにかくれていて、来るやつを見ていたそうです、そしていよいよ網を入れて鯉が十疋もとれたとき、誰だつこらつて出るんでしよう、魚も網も置いたまま一目散に逃げるでしょうバキチは笑つてそいつを持って警察の小使室へ帰るんです。」「変だねえ、なるほどねえ。」「何でも五回か六回かそんなことがあつたそうです。そしたらある日署長のところへ差出人の名の書いてない変な手紙が行つたんです。署長が見たら今のことでしょう、けれども署長は笑つてました。なぜつて巡查なんてものは実際月給も僅かですしね、くらしに困

るものなんです。「なるほどねえ、そりやそうだねえ。」

「ところがねえ、次が^{つきぎ}大へんなんですよ、^{こうぼくしゃ}耕牧舎の^{かいうし}飼牛がね、^{けつかく}結核にかかつていたんですがある日とうとう死^しんだんです。ところが^{びょうき}病気のけだものは死んだら^す棄てなくちやいけないでしょう。けれども何せ売れば二、三百にはなるんです。誰^{だれ}だつて惜^おしいとは思いません。耕牧舎でもこつそりそれを売っているらしいというんです。行つて見て来いつてうわけでバキチが^{けん}剣をがちやつかせ、耕牧舎へやつて来たでしょう。耕牧舎でもじつさい困^{こま}つてしまったのです。バキチが入つて行きましたらいきなり一^{びき}疋の牛を^{たた}叩いてあばれさせました。牛もびつくりしましたね、いきなり外に飛^とび出してバキチに突^ついてかかったんです。

バキチはすつかりまごついて一目^{いちもくさん}散に^{けいさつ}警察へ^に遁げて帰つたんです。そして署長のところへ行つて耕牧舎では牛の皮^{かわ}だけはいで肉と骨^{ほね}はたしかに土に埋^うめていましたつて^{ほうこ}報告したんです。ところがそれが知れたでしょう。

町のものもみんな笑^{わら}いました。署長もすつかり怒^{おこ}つてしまふある朝^{やくしよ}役所へ出るとすぐいきなりバキチを呼^よび出して^こ斯う申^{もう}し渡^{わた}したと云^いいます。バキチ、きさまもだめなやつだ、よくよくだめなやつなんだ。もう少し見^{みどころ}所があると思つたのに牛につつかかれたくらい

で職務も忘れて遁げるなんてもう今日限り免官だ。すぐ服をぬげ。と来たでしよう。バキチのほうでももう大抵巡査があきていたんです。へえ、そうですか、やめましよう。永々お世話になりましたつて斯う云うんです。そしてすぐ服をぬいだはいいんです。が実はみじめなもんでした。着物もシャツとずぼんだけ、もちろん財布もありません。小使室から出されては寝む家さえないんです。その昼間のうちはシャツとズボン下だけで頭をかかえて一日小使室に居ましたが夜になつてからとうとう警部補にたたき出されてしまいました。バキチはすっかり悄気切つてぶらぶら町を歩きまわつてとうとう夜中の十二時にタスケの厩にもぐり込んだつて云うんです。

馬もびつくりしましたあね、（おいどいつだい、何の用だい。）おどおどしながらはね起きて身構えをして斯うバキチに訊いたつてんです。

（誰でもないよ、バキチだよ、もと巡査だよ、知らんかい。）バキチが横木の下の所で腹這いのまま云いました。（さあ、知らないよ、バキチだなんて。おれは一向知らないよ。）と馬が云いました。「馬がそう云つたんですか。」馬がそう云つたそうですよ。わつしや馬から聞きやした。（おい、情けないこと云うじゃないか、おいらはひどく餓えてんだ。ちつとオートでも振る舞えよ。）ところがタスケの馬も馬でさあ、面白がつて

オペラのようにふしをつけて（なかなかやれないわたしのオート。）だなんてやったもんです。バキチもそこはのんきです。やつぱりふしをつけながら、（お呉れよ、お呉れよ、お前のオートわたしにお呉れよ。）とうなつていました。そこへ丁度わたしを通りかかりました。おい、おい、バキチ、あんまりみつともないぎまはよせよ。一体馬を盗もうつての。

それとも宿がなくなつて今夜一晩とめてもらいたいと云うのか。バキチが頭を掻きやした。いやどつちもだ、けれども馬を盗むよりとまるよります第一に、おれは何かを食いたいんだ。（以下原稿空白）

青空文庫情報

底本：「ポラーノの広場」角川文庫、角川書店

1996（平成8）年6月25日初版発行

底本の親本：「新校本 宮澤賢治全集」筑摩書房

1995（平成7）年5月

入力：ゆうき

校正：noriko saito

2009年8月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

バキチの仕事

宮沢賢治

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>